

ウイメンズ ブックス

第63号

1997年

Women's Books

5月26日発行

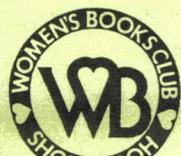
女性の本の情報誌・ウイメンズブック友の会会報

ウイメンズブックストア
 発行所 有限会社 松香堂書店
 本社 〒602京都市上京区下立売通西洞院西入
 土・日・祝日休み TEL/FAX 075-441-6905
 天満橋店 〒540大阪市中央区大手前1丁目3番49号
 ドーンセンター内

水曜定休・祝日代休あり

TEL/FAX 06-910-8627
 郵便振替口座 00900-5-309395

(入会金800円 年会費個人2,200円 団体及び海外会員3,000円)



このリストの書籍をご希望の方は、同封の振替用紙の通信欄でお申し込み下さい。書籍代は送料共でお振り込みくださいますようお願い致します。

ご注文の本の定価の合計額に、下の表の送料を合わせてお送り下さい。なお、お電話でのご注文も受け付けています。

2,000円まで 400円

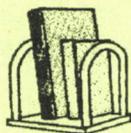
2,001円～4,000円まで 500円

4,001円～10,000円まで 600円

10,001円以上 700円

電話・ファックス・お手紙等でのご注文は、天満橋店にお申し付け下さい。

本誌からの無断転載・コピーはお断りいたします。



最新刊情報



(ここに表示してある価格は、便宜上消費税5%を含んでいます)

〔フェミニズム・女性学〕

『愛と性と母権制』

エーリッヒ・フロム ライナー・フンク編
 滝沢海南子 渡辺憲正訳
 新評論 1997年2月 3028円

エーリッヒ・フロムの論文集。性差と性格、ジェンダーとセクシャリティ、母権制に関する論文などを収録している。1933年から70年までの講演・論文で、既に訳されているものもあるが、今女性学の視点でよんでみるとより興味深い。

『ウエディングドレスはなぜ白のいか』

坂井妙子

勁草書房 1997年1月 2730円

1840年のヴィクトリア女王の結婚式以降、白いドレスとベールは、花嫁の純潔と無垢の象徴として、ミドルクラスにも及んでいく。この時期につくられた性に対する道徳観は、現実と遊離しつつも固定化されていった。

『オーストラリアの女性』

石橋百代

ドメス出版 1997年1月 2100円

80年代「性差別禁止法」「アファーマティブ・アクション法」をはじめ女性の権利を守る法律・政策が実施されるようになったオーストラリア。女性の政府高官、市長、民間企業の上級管理職などのインタビューを混えながら女性施策女性運動がどう進められているかをレポート。日本の女性政策にとって学ぶところは多い。

『オキナワ 女たちは今』

ゆいまーるセミナー編

ドメス出版 1997年1月 1575円

沖縄に住む女たちが沖縄の抱える問題を報告。沖縄のたすけあいの精神、ゆいまーるから生れた。

『女であることの希望』

ーラディカル・フェミニズムの向こう側ー

吉澤夏子

勁草書房 1997年3月 2310円

ラディカル・フェミニズムへの挑発的な反論は論議を呼ぶだろう。「個人的なものは政治的である」ことか

らは絶望しか生まれないとし、「個人的なものの領域」にこだわる。性、家族、美の基準の平等の困難性を言う。しかし、対等でない「多様性」や選択の「自由」が行きつく先に、平等な地平が拓けるのだろうか。

『ジェンダー・アイデンティティ

—社会心理学的測定と応用—

下條英子

風間書房 1997年3月 11550円

性アイデンティティ、性ステレオタイプや性役割の研究を広く概観。また、性アイデンティティの心理学的測定法の問題点を指摘して新しい認知相関測定法を提示している。

『社会福祉のなかのジェンダー

—福祉の現場のフェミニスト実践を求めて—

杉本貴代栄編著

ミネルヴァ書房 1997年5月 2940円

福祉の現場に働く女性たちが「福祉」の中で目につく「女役割」「母性イデオロギー」を指摘し、福祉現場の女性問題解決への提言をしている。相談事業、家族支援、障害者福祉、保育園、老人ホームなど各々の問題点が明かされる。

『女性問題キーワード111』

矢沢澄子監修 (財)横浜市女性協会編

ドメス出版 1997年3月 1785円

女性学・ジェンダー研究の視点で、初心者から専門家までを対象に、女性問題の111のキーワードを選んで解説している。ジェンダー・フリー、ガラスの天井などのことばはよく使われているが、この本をみてフーンと納得する人も多いのではないかな。

『立ち上がるネパールの女性たち』

プラティヴァ・スベティ著

高澤恵美子 辻本和紀子ほか訳

花林書房 1996年11月 1835円

女神を崇める一方、女性蔑視の根が深いネパールで現在女性たちが動き始めた。ネパール女性のこれまでと、現況を報告するとともに、女性組織も紹介している。(本号12p参照)

『ニキ・ド・サンファル 映画「ダディ」を見て、ニキを語る』

ニキ美術館編

彩樹社 1997年4月 2100円

豊かなからだをハートや太陽などの明るい色彩でおおわれた「ナナ」で知られる美術家が制作した映画を中心に、各界で活躍する人達の対談集。父親殺しがテーマの「ダディ」は「ナナ」から想像できないアンビバ

レントなもの。上野千鶴子と宮迫千鶴、道下匡子と針生一郎、三枝和子と吉行和子など対談者の個性がみえておもしろい。

『ハムレットの母親』

キャロリン・G・ハイルブラン

大社淑子訳

みすず書房 1997年3月 5040円

人気探偵小説家でもあるハイルブランの最も新しい評論集の翻訳。

フェミニスト批評の先駆的な評論

を集めている。文学好きのフェミニストにはこたえられない一冊だろう。最適の訳者を得て、フェミニスト批評の面白さが伝わってくる好著。



『母と娘のフェミニズム—近代家族を超えて』

水田宗子 北田幸恵 長谷川啓編著

田畑書店 1996年12月 3460円

文学、マンガ、思想、精神分析の中の母と娘のフェミニズム。役割意識の鏡を叩き割れなかった母と、その鏡に映る自己像に悩む娘—女性の成長物語—母親探し、母親殺しに男はいらない。92年秋のシンポジウムを収録した一冊。

『東アジアの国際分業と女性労働』

藤井光男編著

ミネルヴァ書房 1997年2月 3460円

東アジアへの企業の進出によって起こる「労働力の女性化」を現地のデータを集めて実証的に分析する。海外での女性労働の苛酷さと空洞化後の日本国内のパート労働者の切り捨ては資本主義下の同じ問題として考えるべきだと主張する。

『ブラック・フェミニストの主張—周縁から中心へ』

ベル・フックス 清水久美訳

勁草書房 1997年3月 2730円

ブラック・フェミニストである著者は、「フェミニズムの本質は、家父長制と性差別的抑圧に反対すること」と定義する。バックラッシュと保守化の波をのりこえて、改めてフェミニズム運動の重要性を説く。周縁から中心へのサブタイトルが、フェミニズムの未来を暗示しているように思える。

〔働 く〕

『あきらめないで働きながらの介護術』

ぐるーぶ・アミ編著

現代書館 1997年3月 1785円

働きながらの介護は高齢社会の流れ。さまざまな工夫

や知恵を出し、公的サービスを利用しつつ老いを看取る。仕事を辞めて介護に専念したら精神的にまいってしまふ。働きたいという意思が介護を支える。

『あなたの適職が見つかる本』

ーわたしサイズのお仕事発見術』

平田一二監修 女性の適職研究会編
藝神出版社 1997年1月 1223円

転職願望の強いOLたちは多い。これから就職する人も転職する人も自分に合う職業を見つける方法。性格テストによる適職診断もついている。適職をみつけた人の実例レポートも収録。でもやっぱり自分の本当の姿を知るのが先決だろうな。

『おんなのお仕事イエローページ』

ー就職氷河期の超バイブル』

エイガアル編

扶桑社 1997年3月 1426円

殆ど全ての女性の仕事を紹介。およその収入、仕事の内容、資格が必要かどうかなど。

『肩パットをはずした女たち』

ーウーマンインタビュー集』

ゆうエージェンシー

新時代社 1997年3月 1260円

桜井陽子、松井やより、北沢杏子など新しい時代を切り拓いてきた11人の女性にインタビューをしている。各々のパワフルな活動と共に、自分で選びとってきた生き方に学ぶところは多い。



『雇用における男女平等とは』

川口和子

新日本出版社 1997年1月 1223円

女性差別が見えにくくなり、見抜く力も失われてきている。労働現場での女性差別のポイントを押さえるための入門書。

『在宅ワーク完璧マニュアル』

ウイメンズ・パワーハウス21編

日経事業出版社 1997年2月 1575円

最近、「在宅」のまま「仕事」をすることが可能になってきた。実際に在宅ワークをしている人の経験談、パソコンネットで仕事を見つける法、在宅ワークをするための様々な役立つ方法を教えてくれる。

『女子大学生の就職試験'98年度ー就職ガイダンスと 精選試験問題』

適性能力開発調査会編

有紀書房 1997年3月 735円

『女性起業家物語 太平洋をかこむ9人のエグゼクティブ』

五代みつる他

愛知書房 1997年3月 1733円

女性起業家を取材。依存的では起業はできない。皆、各々苦労もあるが、前向きに毅然とした生き方を選びとっている。

『女性に有利な資格のカタログ150 98年版』

一ツ橋書店編集部

一ツ橋書店 1997年3月 1050円

『女性の職業と専修・各種学校ガイド'97年版』

ー自分を磨き輝かせる仕事と学校の最新情報ー』

関口義

啓明書房 1997年3月 1478円

仕事の内容も紹介している親切なガイドブック。

『女性労働判例ガイド』

浅倉むつ子 今野久子

有斐閣 1997年4月 3570円

研究者と弁護士の著者二人の共同作業によって女性労働に関する判例をほぼ網羅的に取り上げ解説している。問題点を項目ごとに解りやすくときほぐし、実務の指針が付記されているのも親切だ。小さなことでも、職場で不審に思うことがあるときには、この本を広げてみるとよい。図書館には、必ず備えてほしい本だ。

『脱OL！ニューヨークで成功する法』

武石越路

ユック舎 1997年1月 1680円

日本OLを10年したのち、ニューヨークで起業した女性の体験をもとに書かれた本。ニューヨークで日本人男性の上司のもとでは働かない方がいいなど、外国で働きたいと思っている女性の実際的なアドバイスはいい。ただ夢をもたせるのはいいが、リスクのあることもしっかり書いてほしい。

『共働き生活がもつとうまくいく発想法』

スデヴァーン・E・ホブフォール&

イヴォンヌ・H・ホブフォール 福沢恵子訳

実務教育出版 1997年3月 1575円

アメリカの心理学者の夫婦が共働きをしながら、幸せな夫婦、親子の関係を築く方法を紹介している。家庭に優しい職場とは？の章は、日本企業にもぜひ考えてもらいたいところ。チェックリストもついているので、一度試してみても？



『21世紀の女性と仕事—キャリアと子ども—

(女性と仕事研究所ブックレット No1)』

金谷千慧子編著

啓文社 1997年3月 1050円

女性と仕事について、現状、展望などを項目ごとに短文にまとめ、英文対訳をつけたもの。21世紀に向けての女性と労働に関する提言も付記している。

『40歳からのライセンス』

JKプランニング編

自由国民社 1997年2月 1470円

40歳は折り返し点。ナビゲーターは自分自身。資格制度の紹介とアドバイス。

『働く女性のパワーアップメニュー』

女性ユニオン東京編

教育史料出版会 1997年3月 1575円

女性ユニオン東京結成後2年。交渉のケースをフルコース仕立てで紹介する。ワンポイント・アドバイスもケースに応じて適確にまとめられている。

『辞めることから始めよう 行動編』

笠原真澄

サンクチュアリ 1996年12月 1223円

思いきって辞めてみて「ため息をつかなくなった」「本当にやりたいことが見つかった」と元気になった女性たちの声を集めている。表題通り、辞めることから違う自分の道を探り当てることも可能だろう。日本も豊かになった！とつくづく思う。



『ワーキング・ウーマンのためのQ & A 100』

中島通子 福沢恵子編

亜紀書房 1997年3月 1890円

ワーキング・ウーマンは、こんな本を待っていた。仕事とプライベートのどちらも大切にしたいワーキング・ウーマンにとって、こんな

ことが知りたかった。いい質問に、いい答が返ってくる。文章が生きている、おすすめのハンドブック。

〔結婚・家族〕

『生まれかわる家族』

鳥山敏子

法蔵館 1997年3月 1890円

登校拒否、自殺、いじめ、引きこもり、家庭内暴力、過食など、子どもたちの心の悲鳴が様々な形をとるといふ。何に傷つき何を失なっていたのかをたどるた

めのワークを著者は数多く手がけてきた。様々な実例と共に本人の意識の下にかくされている傷を癒していく。「イメージ授業」を作り出した著者の実践をふまえたエッセイ。

『うまく別れるための離婚マニュアル 改訂版

—協議離婚・調停離婚・裁判離婚・離婚書式』

石原豊昭

自由国民社 1997年3月 1365円

『男に媚びない女の生きかた

—いい恋愛、いい結婚をしたかったら』

吉村たかみ

文香社 1997年4月 1365円

恋愛や結婚に対するアドバイスだが、ポジティブな考え方、生き方をしようと、繰り返して述べている。何でも人のせいにしたがる女性たちへ、しっかり現実を見るようすすめる。著者はしかし男は外で働き、女は家という考えから抜け切れていないようだ。

『＜家族＞イメージの誕生

—日本映画にみる＜ホームドラマ＞の形成』

坂本佳鶴恵

新曜社 1997年1月 3893円

1950年代、映画全盛期から60年代高度成長期へ。「母もの」から「ホームドラマ」へと、映画の中の家族の描かれ方が変わっていく。映画ジャンルを縦糸に、社会的に家族変動を跡づけ、女性の意識の変化が果たした役割をとらえる。

『＜家族＞からの離脱』

芹野陽一編

社会評論社 1997年1月 2415円

著者は、個人という思想を育てない家族主義、共同体の土壌を批判的に考察。子どもの側から＜家族＞を構築していくことを説き、人権意識と家族問題にも鋭く迫る。家族と教育、国籍法と在日朝鮮人など十編の論文を収録。

『女性のための離婚講座

—離婚の法律がわかり、上手に離婚するために』

石原豊昭

自由国民社 1997年3月 1680円

『セカンドチャンス—離婚後の人生』

ジュデイス・S・オーラースタイン 高橋早苗

草思社 1997年3月 2310円

離婚した夫婦とその子供たちを15年間追跡調査して、親と子どもたちへの長期的な影響を探った。離婚後ど

の時点で、どのような問題に直面し、それをどう克服したのか、なぜできなかったのかなど心理学者の所見をまじえて書かれている。家庭とは何かを考えさせられる。

『私が結婚しない理由』

近代文芸社編 近代文芸社 1997年2月 1528円
20代から60代、それぞれの年代別で「私が結婚しない理由」を語る。「結婚」を考えるにあたりぶつかること、結婚しないことによって生じる不安「結婚できなかった理由」などが、女性問題の視点から語られておらず、確信的なものはあまりない。

〔自伝・評伝〕

『女書生』

鶴見和子
はる書房 1997年2月 3150円
戦前、アメリカに学び、哲学から社会学へ。自由主義をベースに日本の生活文化を分析した先達の女性の仕事歴。「父・鶴見祐輔のこと」の章が胸を打つ。



『女にくせに』

一草分けの女性新聞記者たち
江刺昭子
インパクト出版会・イザラ書房
1997年1月 2415円
明治期、大正期に新聞記者となった14人の女性たちを追う。「女にくせに」という言葉をあびながら、頑張り通すことは大変だ。志半ばで退職した人も多し。今も、女性記者は余り増えていない。

『シルヴィア・プラス 沈黙の女』

ジャネット・マルカム 井上章子訳
青土社 1997年2月 2940円
若くして命を絶った詩人シルヴィア・プラスの「真実」を追う。シルヴィアの伝記は数多いが、この詩人の生涯はほんとうに伝えられたのだろうか。夫、テッドヒューズ（詩人）と研ぎ澄まされた感性の持ち主のシルヴィアとの息詰まるような物語。

『ジョディ』

ルイス・チェノヴィック 原美奈子訳
現代書館 1997年2月 1890円
子役のCMタレントとしてデビューしたジョディが、女優として成功する過程を追う。勉強、仕事。メディアとの闘い。ジョディに女性ファンの多いワケが解った。

『旅立つまでの旅—母がいたドイツ』

川端春枝
お茶の水書房 1996年6月 2940円 (12P参照)

『智恵子その愛と美』

紙絵 高村智恵子、詩・書 高村光太郎
二玄社 1997年1月 2310円
「智恵子の切絵を見ていると、智恵子の魂も肉体も欲望も、全てを感じ、又、私への訴をもひそかに聴く」という光太郎の肉筆の詩と、智恵子の切り絵で構成されている。二人の相聞の高まりを演出した美しい本。

『哲学、女、唄、そして…ファイヤアーベント自伝』

ポール・ファイヤアーベント 村上陽一郎訳
産業図書 1997年1月 2730円
グローバルなスケールを持つ知識人が次々に逝く。科学哲学者ファイヤアーベントの自伝。脱稿後すぐ死を迎えた。学問のみならず家族、愛、情事、音楽など個人史を赤裸々に露呈する勇気は見事だ。

『平塚らいてうの光と蔭』

大森かほる
第一書林 1997年1月 1835円
らいてうの伝記は数多い。しかしこの本は、新発見の資料も駆使してらいてうの真実の姿を描き出している。『青鞥』以来、そのカリスマ性と才能、女性解放運動家として評価の高いらいてうだが、自伝にも書かれなかった戦中の行動が、赤裸々に述べられていて興味もひとしおである。

『百歳人 加藤シヅエ 生きる』

加藤シヅエ
NHK出版 1997年2月 1470円
1897（明治30）年生まれ。生涯の年譜が収録されているが、実にすごい方だ。百歳で「自伝」を書かれたことに感じ入る。脳に自ら刺激を与えるため昼寝はしないとのこと。どの頁にも、生きる力がみなぎっている。

『フロイト・人種・ジェンダー』

サンダー・L・ギルマン 鈴木淑美訳
青土社 1997年1月 3460円
他者へのラベリング—人種、セクシュアリティ、病気という偏見の中でユダヤ人であることで差別を受けたフロイト。その葛藤の中でフロイトが精神分析を誕生させていった真相に迫る。

『凜—近代日本女性の女魁・高場乱』

永畑道子
藤原書店 1997年3月 2100円

今年には西南戦争120年に当る。幕末から明治に生きた主人公は、幼少から父に男として育てられた医師で、のちの「玄洋社」となる塾を開いた女性、高場乱。女が学問の場に入りにできなかった時代、男装して帯刀までしていた。近代日本の胎動期にこんな女性のいたことは、殆ど知られていない。



〔エッセイ・文学〕

『愛さずにはいられないーミーハーとしての私』

柴門ふみ

講談社 1997年4月 1260円

人気マンガ家の甘口エッセイ。「マンガを描くだけの人生なんてイヤ」と人と出あい、ミーハー的好奇心にみちて書いた連載。

『一葉の口紅 曙のリボン』

群ようこ

筑摩書房 1996年12月 1365円

同じ明治5年生まれの一葉と木村曙。家父長制のもと、男や家に縛られながら、小説に命を燃やし尽くした二人の女の短いが強烈な人生を描く。

『インターネット発見伝』

松本侑子、鈴木康之

ジャストシステム 1996年11月 1890円

作家松本侑子ほか8人のインターネットの達人たちの案内で、インターネットの世界をかいまみせる。インターネットにまつわるエッセイ。

『女ひとりドケチ旅』

ー中国ーパキスタンーイランートルコー東欧へ』

辻みゆき

BOC出版 1997年4月 1575円

神戸からポーランドまで、若い女性が船、汽車、バスを乗りついでひとり旅。シルクロード経由のユーラシア大陸旅日記。「あごら」に連載されていたものが一冊の本に。危険もあるが、こんな夢のある旅がしたいものだ。

『女盗賊プーラン』上・下

プーラン・デヴィ 武者圭子訳

草思社 1997年2月 各1680円

低層カーストに生まれたプーランは盗賊団にさらわれ初めて人としての扱いを受ける。虐待した男たちへの復讐。投降し獄中生活11年を経て国会議員に。数奇で

過酷な運命に、女の正義を貫徹した著者の聞き書き。現代のインドの出来事であることに驚かされる。

『看護婦だからできることII』

宮子あずさ

リヨン社 1996年12月 1575円

看護婦の仕事をストレートに読者に伝える語り口がいい。多忙でハードだけれど、ユーモアたっぷりに、患者と看護婦の日常が描かれている。看護婦になりたい若い人たちへのおすすめの一冊。



『かほちやの生活』

宮迫千鶴

立風書房 1997年2月 1680円

伊豆高原に暮らしを移して、自然を愛する人、手作りのものを愛する人たちとの出会いや驚き、自然の中で日々新しい発見をしていく。著者のみずみずしい感性を感じる名エッセイ。ヤサイや畑を描いた絵がまた楽しい。

『50代、女ざかりと男の自立』

樋口恵子

文化出版局 1997年3月 1260円

評論家として、高齢社会をよくする女性の会代表として大活躍の著者は今もっとも輝いている女性の一人。50代以降の女性たちへ愛をこめて贈るエッセイ。人生を見直し、老いを考えはじめる50代。充実した50代以後を生きるヒントがいっぱい。

『添乗員さん大活躍』

大庭かな子

筑摩書房 1997年3月 1260円

フリーの添乗員として160回ものツアーを経験した著者の体験談。旅先ではどんな人も地が出てしまう。苦勞も多いが楽しみも多い仕事だという。旅のワンポイントアドバイスもあって旅好きの人にはいい。

『時を飛翔する女』

マージ・ピアシー 近藤和子訳

學藝書林 1997年2月 2940円

60年代末～70年代はじめ、アメリカの反戦運動、女性解放運動を闘ってきた著者は「政治的なことは個人的なこと」と小説の中で訴える。主人公はメキシコ系アメリカ人のチカーナ。未来と行き来するSF手法を用いた壮大な長編ドラマ。

『ハンサムな女たちー77人の映画のヒロイン』

和久本みさ子

清水書院 1997年2月 1522円

映画の中のハンサムなヒロインに乾杯！いい女を演ずる女優たちの紹介がいい。連載コラムだったので短文なのがちょっと惜しい。

『ロマンティックな旅へーイギリス編』

松本侑子

幻冬舎 1997年2月 2100円

名作の舞台となった地を訪ねる紀行エッセイ。不思議の国のアリスのオックスフォード、嵐ヶ丘のハウースの荒野、クマのプーさんのハートフィールドなどおなじみの名作への著者の思いや沢山の写真が楽しませてくれる。関連図書ガイドにインターネット・ホームページ案内もついている。

『わたしがわたしになるために』

山崎朋子

海竜社 1997年3月 1575円

重いテーマをていねいに余韻を残して読者に届くエッセイ。「史を知らない、とりわけ戦後を学ばない若い世代に読んでほしい」という著者の思いが伝わる。

『こころ・癒し』

『アダルト・チャイルドが自分と向きあう本』

アスク・ヒューマン・ケア研修相談室編

発行 アスク・ヒューマン・ケア

1997年3月 1575円

アダルト・チャイルドは大人になっていつのまにか援助職についているという。自分の深い感情と向き合い、深く感じることで、自分を生きるための示唆が述べられている。

『居場所のない子どもたち』

ーアダルト・チルドレンの魂にふれるー』

岩波書店 1997年2月 1260円

アダルト・チルドレンの心の癒しの実践をしている著者が「ワーク」を通して見える本当の姿から、親や教師と子どもの「心」のゆくえを探る。

『顔をなくした女』

ー〈わたし〉探しの精神病理』

大平健

岩波書店 1997年1月 1680円

今や人間の内面を読み解くのは文学者ではなく精神科医の領域になったのだろうか。複雑な世の中で自分探しを切実に求める人たちの心の世界をていねいに文学性豊かに描いている。

『コントロール・ドラマ』

ーそれは「アダルト・チルドレン」を解くカギ』

信田さよ子

三五館 1997年3月 1470円

美徳とされてきた家族愛、親の愛、母の愛の中にひそむ支配。そんな支配を受けてきた人は、また別の人を支配するという。この様な人間の関係性をコントロール・ドラマと名づけた。様々な家庭を例に、自由と孤独本当の家族愛を考える。

『心的外傷と回復』

ジュディス・L・ハーマン

中井久夫訳

みすず書房 1996年12月 7137円

レイプ、児童虐待、ホロコースト、

家庭内暴力、戦場からの帰還兵、

災害などところに傷を負う人は多

く様々である。そうした心的外傷とその治癒過程、治

療に関してのもっとも代表的な著作といわれる。精神医

学、フェミニストカウンセリングなどに必携の書である。



『それでも吐き続けた私』

ー過食症を克服した29歳の記録』

富田香里

講談社 1997年1月 1470円

自分の言葉で自分の過食症のありのままを綴った。家族、恋愛、キャリア願望など、心の問題と切り離せない。ダイエットから吐くことを覚えエスカレートしていく。筆力のある書き手を得て女性の生き方の問題もみえてくる。

『どんなことがあっても自分をみじめにしないためには』

ー論理療法のすすめ』

アルバート・エリス 国分康孝・石隅利紀訳

川島書店 1996年7月 2625円

カウンセラーのところへ相談に行くほどの悩みではないが気持ちが晴れず、やけ酒、やけ買いなどに走る人たちの根本的な解決方法を探る。

『母親の心の傷が癒されてゆくとき』

東京心理教育研究所「親の会」編

青樹社 1997年3月 1260円

愛する我が子の不登校、閉じこもり、家庭内暴力、非行等々で苦しむ人たちが作る「親の会」。そこで明かされる様々な悩みから、立ち直るまでの道程。

『わが娘を愛せなかった大統領へ』

ー虐待されたトラウマを癒すまで』

パティ・デイビス 玉置悟訳

KKベストセラーズ 1996年12月 1630円
 元大統領のレーガンの娘の伝記。ドラッグ中毒の母と娘に愛情を示さない父。両親を傷つけるためではなく、傷ついた同じ問題に悩む人たちのために語ることが義務であると思って書いたという。著者が自身をみつけるまでのプロセスはスリリングで説得力がある。

〔からだ・性〕

『産む産まないを悩むとき

—母体保護法時代のいのち・からだ』

丸本百合子 山本勝美

岩波ブックレット 420円

優性保護法の歴史とそれが母体保護法に改正されるまでの経過が報告されている。優性保護法から母体保護法になってどう変わったのか、どう変わるのか。

『女の病気を治す大事典—治療法のすべてがわかる本』

雨森良彦、菅井正朝、勝田正泰監修

二見書房 1996年12月 2730円

女性のあらゆる病気は、西洋医学、東洋医学、その両方の併用、またその他の周辺医学をもちいて、治療に効果をあげるようになった。病状に最適の方法を見つけるよう、健康法、食品に至るまで紹介している。

『更年期を迎える—からだの転換期と心の準備』

C・スー・ファーマン 金城千佳子訳

三田出版会 1996年12月 2100円

団塊の世代といわれた人たちが閉経期にさしかかろうとしている。更年期についての本は沢山出ているが、この本は閉経前のサインから、未来へ向けての準備まで親切に解説する。医学的なことも一般の人に解るように書かれている。気になるホルモン療法についても述べられている。

『ささえあって乳ガン手術—早期発見から、手術、術後のこころ・からだのケアまで』

寺田信国

健康同人社 1996年12月 1575円

乳ガンの発見から、受診の仕方、告知、治療法、術後のケアや心の問題、セックスにも助言。イラストを使って解りやすく説明している。

『産育史—お産と子育ての歴史』

国本恵吉

盛岡タイムス 1996年5月 6825円

産育習俗の思想の歴史、月経の歴史、お産の習俗などから避妊、墮胎、産科の発展の歴史に至るまで、各地を訪れて、歴史資料調査を行った。産婦人科医である

著者が、何年もかけた労作。

『自分でできる乳ガン手術後のリハビリ

—からだをきたえ、痛みをやわらげるために』

ダイアナ・スタン 青木玲訳

保健同人社 1997年3月 1575円

乳房切除、腫瘍摘出、腋窩リンパ節郭清…どれをとっても、乳ガン手術は大きな傷あとを残す。乳ガン手術後の身体症状をよりよくするために、手術後に必要なことや、運動機能を高めるための体操、皮膚の手入れ法などをリハビリの専門家が親切に教えてくれる。

『女性と出生前検査—安心という名の幻想』

カレン・ローゼンバーグ／エリザベス・トムソン

堀内成子／飯沼和三監訳

日本アクセル・シュプリング出版

1996年10月 2940円

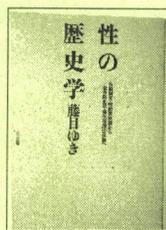
妊娠中にハンデを持って生まれるかどうか、出生前検査の技術はどんどん開発されている。その結果中絶を選ぶことも、産むこともできる。しかし、その技術を受ける女性にどのような変化が起こりつつあるか？疑問を持った現場に関わる専門家（全員女性）たちが、議論の背景、法的、心理と社会文化的問題を女性の立場で議論したシンポジウムの記録集である。すべての人々に考えてほしい問題だ。

『〈性〉のミステリー—越境する心とからだ—』

伏見憲明

講談社現代新書 1997年3月 672円

女でありたい男、男でありたい女、男が好きな男、女が好きな女。セックス差よりジェンダー差の方が大きいと思われる人々の個性。一人ひとり違う性と社会との関係を面白く明かしていく。



『性の歴史学—公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』

藤目ゆき

不二出版 1997年3月 5040円

欧米先進国にならって明治政権は日本人民の性と生殖を統制する。

公娼制度・墮胎罪、人口政策のすべては女性とりわけ貧しい女性たちに犠牲を強いた。

廃娼運動や産児制限運動、女性の解放運動がどのように提唱され、どのような経路をたどりながら今日に至ったのかを詳しくたどった労作。文章も読みやすく一気に読める。

『できちゃったらどうするマニュアル』

福島瑞穂監修

新講社 1996年11月 1260円

突然やってくる「できちゃった」ときのいろんなシチュエーションに対応したアドバイス。困ったときの相談先も載っている。このタイトルよくできているね。

『トランスジェンダリズム 性別の彼岸

-性を越境する人びと』

世織書房 1997年4月 3570円

性自認と性的指向の違いをインタビューなどを通して考察。トランスセクシャル(性同一性障害)について、日本とヨーロッパの捉え方の違いや、医療の側からの声も集めた。日本はまだインターセックスやトランスジェンダーなどについては殆ど理解されていない社会であることが解る。

『野末悦子の女のからだクリニックQ&A』

野末悦子

主婦の友 1997年3月 661円

女性の身体はほんとうに複雑だ。そこで病院に行くのも何だけど、やっぱり心配というような症状もいろいろある。不正出血、外陰のかゆみ、乳房の悩みなどがそれ。Q&Aで答えてくれるミニブックス。

『闇の中の女性の身体-性的自己決定権を考える』

若尾典子

学陽書房 1997年4月 1890円

著者のいう「女性の身体を闇の中に置いてきた買春保証システム」の歴史をたどり、性的自己決定権とはどういうことかを探る。著者はあえて「性業従事女性」という表現をもちい問題の本質をあいまいにしないのがいい。

『私たちのお産からあなたのお産へ

-アンケート493人の声より』

ぐるーぶ・きりん編

メデイカ出版 1997年1月 2535円

出産体験のアンケート調査を通して産む人の生の声が伝わる。分娩台、会陰切開、陣痛促進剤、母子隔離など現在のお産が自分のものでない様子が浮き上がってくる。病院での管理出産で失ったものは大きい。

〔性・暴力〕

『許せん！セクハラ』

世田谷ボランティア協会 ジャパンマシニスト

1997年3月 866円

子どもへの性的虐待、性的いやがらせは、親、学校の

先生など身近かな人から受けることが多く、陰湿である。子どもに言わせろ！ホットラインの相談からみた実態の報告。

『子どものねだん-バンコク児童

売春地獄の四年間-』

マリー・フランス・ポッツ

堀田一陽訳

社会評論社 1997年2月 2835円

人道援助団体のタイ青年とカップルを装い調べたその実態は、とて

も信じられないような子どもたちの地獄の生活が一。ベルギーの医療ソーシャルワーカーがタイの子ども買春の実態と救援活動の様子を描くドキュメント。救援にかけ回りながら、自分自身の心の動きもみつめて書き込んでいるので質の高い読みものになっている。



『遊女・からゆき・慰安婦の系譜』

金一勉

雄山閣出版 1997年1月 2575円

従軍慰安婦の発想がいつ、どのようにして始まったかという疑問から、この本が書かれたという。日本の遊廓の発達や繁盛した背景、為政者のねらいなど徳川時代から詳しくたどっている。女性を搾取る構図は今も変わらない。

〔子育て〕

『いい子に育ててごめんなさい

-大人がゆがめる子どもの個性』

前原寛

南方新社 1997年1月 1630円

著者は保育園長、町の教育委員、寺の住職である。いじめ問題は、個別の事象ではなく、すべての子どもの危機なのだと訴える。小さいときから囲いこまれ、振りたてられて育つ子どもたち。いま私たちが気づき、方向を変えるとき。

『延長保育をすすめる

-子ども・父母・保育者にやさしい保育所をめざして』

保育研究所編

ひとなる書房 1997年3月 1575円

保育時間延長にあたっての基本的な考え方や、実践の参考例を、大阪の保育所の状況をもとに編んだ。

『がんばれおんな先生』

クリエイティブ21編

エール出版社 1997年4月 1470円

女の先生はダメだ、女の先生はすぐイライラして怒鳴

る、子どもになめられているなどという声は、女性に対する偏見からくることばだ。女の先生への不信感がどうして生まれるのか。現場の事実に基づいたレポートから、ほんとうの女の先生の姿を探る。

『子育て大改革—もっと子どもに頼って!』

永畑道子

海童社 1997年3月 1470円

もっと子どもを信じて、子育て人間育てをしようと言提言する。

『子どもの健康診断を考える』

山田真 ちくま文庫 1997年3月 651円

現在は「健康強迫症時代」といわれるほど。繰り返しおこなわれる子どもの健康診断は果たして必要なのか。子どもの選別、管理につながってしまうしくみを丹念に明かしている。

『子供不足に悩む国ニッポン』

—なぜ日本の女性は子供を産まなくなったのか—

ミュエル・ジョリヴェ 鳥取絹子訳

大和書房 1997年2月 2310円

著者はフランス人だが、日本で出産・子育てをし、医師や若い母親たちを取材、また日本の育児に関する本も分析。「日本男性のお袋渴望」も問題の根と、少子化日本の子育て事情を確かな目で検証する。

〔女性史〕

『新装版 中世を生き抜く女たち』

レジーヌ・ペルヌー 福本秀子訳

白水社 1997年3月 3360円

王妃から農婦に至るまでを視野に入れたフランスのおよそ1000年にわたる女性史。

『朝鮮女人曼荼羅—朝鮮史を彩った女たち—』

成律子

筑摩書房 1997年2月 1680円

全くといっていい程、隣国朝鮮史に登場する女性の名は日本で知られていない。『朝鮮史の女たち』に続いて、檀君時代から李氏朝鮮時代までの女性たちをとりあげている。

〔男性問題〕

『男たちの更年期クライシス』

宮淑子

NHK出版 1997年3月 1575円

男にも更年期があった。その時、男たちが悩むことはわかる。しかし、そこからの立ちなおりを本当の自立で乗りこえる男は、この本の登場人物の中にはいない。

葛藤の中で自分で決めて、自分で結果を引きうけるのは女たちのようだ。

『モノセクシュアル時代の父親学』

高野清純ほか編著

福村出版 1997年2月 1680円

ライフスタイルに男女の差が少なくなった時代、子育てにおける父親、母親役割も変化する。各章とも発達心理学の研究者によって書かれた新しい父子関係ひいてはパートナーシップを考える本。シングルファーザーについても触れられているが、この執筆者が父親役割、母親役割にこだわりすぎていて、新しい提案が聞けないのが残念。



『よその家の夫たち』

グループREN

ユック舎 1997年2月 1946円

男性の生活意識を調査と14人の男性(夫)たちにインタビューを試みた。男性の生活に課題をしばった座談会も収録している。普通の夫たちは、はたして「男女共生社会」を生活しているのだろうか。今、最も必要なユニークな調査だ。結果は読んでのお楽しみに。

〔その他〕

『現代の世相① 色と欲』

上野千鶴子編

小学館 1996年10月 1609円

戦後日本の欲望一家、車、性、飽食—などをとり上げ、各々の書き手がとき明す。爛熟消費社会日本の中で人々の生活と心はどのように変化したか。豊かさの味は? うそ寒い世相が見えてくる。

『厚生省「福祉汚職」—福祉はだれのものか!』

一番ヶ瀬康子 川井龍介編

労働旬報社 1997年2月 1575円

起こるべくして起こった厚生省の構造汚職。福祉現場の最先端から徹底討論と問題点を指摘。情報公開と監視機構の乏しさが汚職を生む。オンブズパーソン制度の必要性を主張する。

『生涯教育入門 学ぶということ・知ること』

長浜功 黒沢惟昭

明石書店 1997年2月 3675円

教育に関する本は基本的に魅力がないという長浜氏は、教育論を自分の体験も混えて述べている。また、二部では黒沢が「自分史」のなかに社会教育を読む—として自分自身の半生記を示して、社会教育入門へと導いている。

『私にもできる 障害があっても自立した生活
—スウェーデンから—』

ブリッタ・ヨハニソン 友子・ハンソン 訳
萌文社 1997年1月 1529円

MS (多発性硬化症) になった著者と、パーソナル・
アシスタント (個人専用の援助者) との生活。できな
いことはいっぱいあっても一人で暮らせる制度がある。
スウェーデンの福祉最優先の制度を紹介する。

〔雑 誌〕

『月刊女性情報』 4月号

特集 女たちの自分探しへのネットワーク
パドウイメンズオフィス 2752円

『女性労働研究』No31

女性労働問題研究会
ドメス出版 1997年1月 1575円

特集1. 「新・日本の経営」とジェンダー

特集2. 高齢社会の福祉とジェンダー

高齢社会における女性労働が担うジェンダー
問題 (杉本貴代栄) ほか、どれも時宜を得た、
力のこもった論文が並んでいる。

『シアターアーツ』7号

特集 フェミニズムと演劇
晩成書房 1997年1月 1890円

石田達郎、斉藤綾子らの座談会、「ジェンダー、視線、
誘惑、そして演劇」を収録。水田宗子「家族制の終章
とフェミニズム」ほか

『女性施設ジャーナル』VOL.3

特集 市民支援
(助)横浜市女性協会
1977年4月 2100円

女性センターは今各地で誕生して
いる。今号は市民活動やNPO支援
の考え方と具体的な方法の特集。



●Information from SHOKADOH

- 1997年度分の会費未納の方は、至急お振込み頂
きますようお願い申し上げます。
- 消費税が上って、本号から本に表示してある本
体価格に5%の消費税をプラスした金額を掲載
しています。
本はこれまで内税でしたが、4月から外税になっ
たため混乱が生じています。「消費税絶対ハン
ターイ」と改めて叫びたい毎日常です。

〔資 料〕

『買春春問題資料集成 (戦前編)』

第1回配本 第1巻～第3巻 (廃娼運動編I～III)
不二出版
78750円

『江戸時代女性文庫51～60』

大空社編
大空社 1997年3月 各10500円

『婦人第9巻～12巻 全関西婦人連合会機関誌』

不二出版編
不二出版 1997年3月 86520円 (分売不可)

『叢書 女性論 34	Facing two ways』	9175円
『叢書 女性論 35	処女読本』	6627円
『叢書 女性論 36	日本農村婦人問題』	8155円
『叢書 女性論 37	子どもとともに』	11424円
『叢書 女性論 38	夫婦教育』	8155円
『叢書 女性論 39	青春の女性』	8155円
『叢書 女性論 40	母性の歴史』	8665円
『叢書 女性論 41	女性と文学』	9175円
『叢書 女性論 42	婦人に与う』	11424円
『叢書 女性論 43	婦人と文学』	8665円

監修山崎朋子 大空社編 大空社 1997年4月

『生涯学習・人権教育 基本資料集』

白石正明・中島智枝子・灘本昌久編
阿咩社 2415円

生涯教育・人権教育に必要な諸資料を網羅。人権擁護
施策推進法(1996.12)まで収録。

— お知らせ —

'97 ASNY SEMINAR 第12回 女性学シンポジウム

〔フェミニズムとマルチメディア〕
— インターネットを女性の手に —

恒例の夏の女性学シンポジウムも12回目。今年のテー
マはマルチメディア。女性のためのメディア・リテラ
シーの意味を探ります。たくさんのご参加を!

と き/1997年7月6日(日) 10:30～16:00
と ころ/京都アスニー (京都市生涯学習総合センター)
コーディネーター/鈴木みどり
パネリスト/楠瀬佳子・竹中ナミ
参加費/2,000円
主催/(財)京都市社会教育振興財団
京都市生涯学習総合センター
問合せ: 075-212-9071 フェミニネット企画

あなたの情報・わたしの情報

「響きあう女たち

—フェミニズム・その困難と暮らしへの回路—
あだち女性学研究会編

女性学の研究者、学者、専門家そして地域で何らかの活動をしている女性たち36人の自己語りを中心に、フェミニズムを考えてみよう企画された、一学習グループが発行した図書です。

「論」ではなく「経験」を語ることで、そして極めて個人的と思われることも、実は声を出していいのだとわかってきたこと、そこに共感が得られるならば、一つの力になるのではないかと考えています。

240ページ、A5版、定価は1785円送料300円で下記に直接申し込んでください。

〒121 東京都足立区竹の塚5-31-2-107
TEL&FAX 03-3885-5452 下村美恵子

「シンガポールライフ—駐在員妻たちの場合—」

「元気の出る会」発行

海外駐在員の妻の生活って「優雅」だと思いますか？安全で便利なことで知られているシンガポール。私たち駐在員妻の生活は「優雅」と紹介される場合が多いようですが、決してそうとばかりはいえません。

駐在員である夫たちの任期は3～5年。夫の赴任に多くの妻が仕事を退職したり、大切に育んできた人間関係を断って同行します。しかしここでの生活は、日本人妻たちにとっては生き方の選択肢が少なく、また日本人社会の狭さもある悩みを抱える場合も多いのです。

かけがえのない数年を、シンガポールで妻たちはどんな思いで暮らしているのか…日本人駐在員妻387名から回答を得ました(回収率70.4%)。『シンガポールライフ—駐在員妻たちの場合—』は、その調査結果報告です。主な内容は「調査結果のグラフと解析・考察」、熱心な声が寄せられた自由回答を分類・整理した「自由回答欄集計」、調査の最終考察を兼ねたメンバーの本音トーク「アンケート調査を終えて」を収録。

価格：1050円(送料別)

問い合わせ：小林まり子 TEL FAX 001-65-7735674
87 PASIR PANJANG HILL KENTVIEW
PARK #04-02 SINGAPORE 118892

申込み先：池内小百合 TEL FAX 0798-53-8611
〒663 兵庫県西宮市上大市5-3-13

「キリスト教女性史研究」

日本キリスト教女性史研究会 米田あかね

近代日本キリスト教史を軸として、女性史研究を行ってきたグループが、東京女子大学の青山なを研究奨励金を得て、その研究成果の一端をささやかながら一冊にまとめた。

盛り込まれた論考は多岐にわたり、その叙迷のスタイルも様々である。

内容は以下の通り。

「日本の女子高等教育とフェミニズム—女子専門学校：その起こりと発展」「女性史におけるYWCA—キリスト教女性団体の中で」「二宮ワカの社会活動—その生涯とごと」「明治期出版法規に拠る矯風会機関誌の変遷」「大館可免の生涯」「1950年神奈川県における売春女性に関する事例報告—裏側の「調査表」に見る」

わずか78ページの冊子ではあるが、各メンバーの問題意識と課題とが満ちている。次のステージに進むために各自が踏み出した初めの一步の一冊である。

日本キリスト教女性史研究会
〒203 東京都東久留米市学園町1-9-12 (525円)

「立ち上がるネパールの女性たち」

自立と向上を目指して、今まさに…

プラティバ・スベディ著 花林書房 定価1835円

伝統的な男性優位社会の中で女性達が今、差別、抑圧、搾取と社会的公平の実現というごく当たり前の要求を掲げて立ち上がろうとしている。

女性運動の先頭に立つスベディさんが、人身売買、苛酷な労働、エイズの蔓延など現代ネパール女性が置かれた厳しくも生々しい現況を報告し、自立と向上のための確かなステップを提言する注目の書である。

(著者の紹介)

'54年カトマンズに生まれる。トリヴァン大学教育学部学士課程、経済学部修士課程を卒業後、同大学商学部で教鞭をとる。

'84年より精力的に女性啓発運動に携わり、女性に関する記事や随筆はさまざまな新聞雑誌に掲載され、国の内外で語り続けている。

雪吉政子 〒700 岡山市西崎11-31-191-202

「旅立つまでの旅—母がいたドイツ—」

川端春枝 さしえ今井恵子 御茶の水書房 1996年

私の母佐野えんねは、1901年ケルンに生まれハノーファーで育ちベルリンで古書籍商に勤めて、1933年来日、60年間日本に住んで日本の土になりました。これは、母がドイツにいた32年間の思い出をまとめたもの、少女エンネの成長物語です。今世紀初頭のドイツに身を置いて、エンネとともに小さな女の子の視点で細々とした日常の暮らしを体験してください。

私は自分の娘に母の話を伝えたくてこの本を作りました。「娘が母の話を自分の娘にしてやる、母の話にはその母親が大きな役割をもって登場する、つまり、母から娘へという語りの本」(御茶の水書房の橋本氏)でもあります。読者からのお手紙にも「母親を思い出した」というのが多かったのです。国の違いを越えて読んでいただけたのがとてもうれしいことでした。(川端春枝)

(この欄の本は松香堂でも扱っています。)

連載 第60回

ミニコミの女たち

パワーアップ・プランニング

子育て応援情報誌を発行する
京都で一番元気なグループ

井上はねこさんの講座からすべては始まった

1991年子連れの主婦ばかりでグループを結成。託児つき講座だった京都市主催の編集講座で出会った仲間たち7人と、はや7年目のつきあいになる。今考えるとあの講座に出、井上はねこさんや仲間たちと出会ったことは人生を変えるほどスゴイことだった。

子ども連れで活動するということは、並大抵のことではない。はねこさんからパワーと勇気もらい、編集経験など何もない子持ちの専業主婦という最悪の条件から、一歩ずつ一歩ずつ歩んできた。この間、快く「京都子連れパワーアップ情報」の販売を引き受けてくださったジュンク堂書店店長南浦邦仁さんや、いつも温かく励ましてくださる木下明美さんをはじめ、本当に大勢の方々のエールを受け、ここまでこれたと思う。昨年には全国の子育て情報誌の編集者が京都に集う、「マミーズ・サミット」を開催。ネットワークはますます広がり、人と出会う楽しさに心躍る日々だ。

活動の転機となった「子ども虐待は他人事ではない」

読者参加の「パワーアップ・ニュース」の発行を重ねながら、子育てを通じて見える女性問題を自分たちの問題として考えてきた。特に「子ども虐待は他人事ではない」に取り組んで、母親だけが子育てを担う状況の中で、子どもにイライラするのは、たくさんの母親に共通する問題だと気づいた。みんなが夫と子育てしたいと強く願い、本音で話せる友達を求めている。悩んでいる女性に力になりたい。これが活動の原点になり、活動を継続できるエネルギーにもなっている。

「おしゃべりクラブパワーアップ」が元気の素

メンバーそれぞれが、子育てや夫との関係で悩み、それをミーティングで吐き出しながら、よりよい方向を求めて模索してきた。ハイビジョン静止画作品「いっしょにやろうよ、元気な子育て。子育ては女の仕事？」「子どもたちのゲルニカ。いじめから子育てを考える」には、どうすれば女性が自分を大切にしながら子育てできるか、私たちのメッセージがいっぱい込められている。ぜひごらんいただきたい。



子どもを持つ女性の人権と、自立をサポートしたい

子どもたちも大きくなり、メンバーの状況もそれぞれ変化した。京都市女性総合センター嘱託職員2名をはじめ、全員が編集やライター、イラストの仕事を受け負い、文章講座や編集講座の講師を勤めるまでになった。子育てグループから女性問題を考えるグループへと移りつつあるが、やはり子どもを持つ女性へのサポートが必要だと、今年3年ぶりに「京都子連れパワーアップ情報3」の発行を予定している。

子どもを持つ女性には未だに母性神話、3歳児神話に代表される「いい母親像」の縛りがある。性別役割分業から解放され、女性が自分を大切に、自分をいとおしく思えてこそ、子どもは限りなく可愛いし、ゆとりを持って子育てでき、素敵な親子関係が築けるのだ。未来を担う子どもたちを大切に育てたかったら、まず母親である女性の人権を守ることが大切だと、私たちは言い続けたい。

ただいまニュース会員募集中、年間購読費送料込み1500円。気軽にお問い合わせを。(丸橋・記)

パワーアップ・プランニング連絡先

〒616 京都市右京区嵯峨広池沢下町37-25

代表 丸橋泰子

TEL & FAX 075-882-4326

E-mail: mh5010@mbox.kyoto-inet.or.jp

NIFTY-Serve ID VZP04606



ミニコミ情報

(松香堂で扱っているミニコミの最新情報です)

- 「れ組通信No.118-ちかごろ不思議なこといろいろ」
れ組スタジオ・東京 1997年1月 420円
- 「れ組通信No.119-レズビアン的感觉(その7)」
1997年3月 420円
- 「れ組通信No.120-世里愁さんに直撃インタビュー!!」
1997年3月 420円
- 「Fifty:Fifty VOL.34-特集『従軍慰安婦』が教科書に載った、いま」 Click 1997年3月 428円
- 「月刊むすぶNo.314-特集 からだにやさしい住宅Ⅲ」
ロシナンテ社 1997年2月 700円
- 「月刊むすぶNo.315-特集 障害者が虐待される」
1997年3月 700円
- 「月刊むすぶNo.316-特集 生きものの声に耳をかたむけて」
1997年4月 700円
- 「Voice第79号-今年こそ、婚外子差別の撤廃を!」
住民票統柄裁判交流会 1997年2月 210円
- 「Voice第80号-もう出生差別はやめようよ」
1997年3月 210円
- 「おんなの叛逆No.45-特集・女性駆け込みシェルター」
久野綾子 1997年1月 420円
- 「女のからだからNo.140-母体保護法に胎児条項を入れる案に反対する意見書」
SOSHIREN女のからだから 1997年3月 315円
- 「女のからだからNo.141-どうなった?受精卵診断&胎児条項」
1997年4月 315円
- 「女たちの21世紀No.10-特集 メディアと女性」
アジア女性資料センター 1997年3月 1050円
- 「あごら226号(復刻版)-女がはたらくこと」
BOC出版部 1997年2月 899円
- 「あごら227号-特集 なぜ今『自賛史観』か」
1997年3月 1050円
- 「あごら228号-特集 『わたしの声』を国会に」
1997年4月 1050円
- 「シングルス・ネットVOL.33-個の自由と自立、対等で優しい関係を求めて」
確信犯?シングルの会 1997年2月 262円
- 「屋台村通信第10号-特集①:どうする、どうなる学校給食」
屋台村通信 1997年3月 315円
- 「VOICE OF WOMEN No.179-『女性学年報』17号合評会報告」
日本女性学研究会 1997年3月 157円
- 「VOICE OF WOMEN No.180-『女性学年報』17号合評会例会企画者としての感想」
1997年4月 157円
- 「JAPANESE WOMEN No.77-TOWARD THE YEAR2000」
市川房枝記念会 1997年3月 105円
- 「FLCニューズレターNo.22-特集『癒し』」
女性ライフサイクル研究所 1997年4月 315円
- 「女のためのクリニックニュースNo.142-WCO12周年記念大会報告『女たちが望む心とからだのケアとは何か②』」
ウイメンズセンター大阪 1997年2月 420円
- 「女のためのクリニックニュースNo.143-WCO12周年記念大会報告『女たちが望む心とからだのケアとは何か③』」
1997年3月 420円
- 「くらしと教育をつなぐWe2・3月合併号-特集 女性と自己表現」
フェミックス 1997年3月 630円
- 「くらしと教育をつなぐWe4月号-特集 新しい人間関係を求めて」
1997年4月 630円
- 「IBU-IBU Vol.10-特集 誰も言わないこと」
トランタン新聞社 1997年4月 315円
- 「アウロラ第3号-インターネットのホームページができました」
女性のためのカウンセリング講座卒業生交流会 1997年3月 315円
- 「ネットニュース NO.5-行動計画の新時代」
世界女性会議ネットワーク関西/事務局 1997年1月 630円
- 「ネットニュース NO.6-アジア太平洋女性ネットワークフォーラム報告」
1997年3月 630円
- 「HEARTあいNEWS NO.15-特集/アトピーから学ぶ日本人本来の食」
HEARTあいNEWS編集部 1997年2月 210円
- 「HEARTあいNEWS NO.16-特集/安心して食べられる野菜を手に入れたい」
1997年4月 210円
- 「さねばなNO.4-特集I密貿易時代」
奄美女性史サークル 1997年3月 840円
- 「プロシーム3月号-特集『予防接種にも情報公開を』」
大阪よどがわ市民生活協同組合 1997年3月 330円
- 「プロシーム4月号-特集『三高食の子どもたち』」
1997年4月 330円

- 「WIFE264号-特集 ふるさとの伝統行事」
わいふ編集部 1997年3月 550円
- 「WIFE265号-特集 私の初体験」1997年5月 560円
- 「月刊家族第133号-特集 離婚・非婚・死別を超えて」
家族社 1997年3月 315円
- 「月刊家族第134号-特集『姑・嫁-女=古い家/姑・嫁-女=古い家=女』」
1997年4月 315円
- 「シネマ・ジャーナルVol.40-特集 '96年度読者&スタッフが選ぶベストテン」
テス企画 1997年3月 800円
- 「ピーマン・インフォメーション4月号-ピーマン・フォーラム『元気になる“人間情報誌”のつくり方』
ピーマン・ネットワーク事務局 1997年4月 840円
- 「TOK・TALK4月号-育児・健康・フリマなど関西の身近な情報」 TOK・TALK 1997年3月 420円
- 「環境イベントガイドPico4・5月号-春の環境イベント情報満載」
大林輝 1997年4・5月 367円

- 「子宮内膜炎患者実態アンケート調査結果 (JEMA小冊子シリーズVol.1)」
日本子宮内膜炎協会 1996年10月 840円
- 「大企業の女性差別とそれを許す労働省を問う-半分の賃金でも男女平等?」
住友男女賃金差別事件弁護団 1997年3月 525円
- 「神戸・沖縄女たちの思いをつないで-私たちは性暴力を許さない! '96.3.20集会報告集」
『性暴力を許さない女たちの集会』実行委員会
1997年2月 840円
- 「第2回ソウル『東アジア女性フォーラム』報告・資料集-'96.8.22~24於韓国ソウル」
アジア女性資料センター 1996年11月 2100円
- 「女の子宮とる とらない?」
ウイメンズセンター大阪 1997年3月 735円
- 「ひらけ ごま!」イラストでよむ北京世界女性会議
「行動綱領」プラウ・プロジェクト
1997年3月 535円

▲▲▲▲▲ わたしの出会った本 ▲▲▲▲▲

「異文化論への招待」を読んで

(黒木雅子著 朱鷺書房 1890円)



自己主張トレーニングのなかで、「あなたもOK、私もOK」というのがある。それは相手を攻撃するのではなく、又自分が我慢して受け身になるのではなく、お互いに主張を認め合おうという事なのだが、まさしく異文化との出会いとはそれと同じだと思った。

「異文化論への招待」というタイトルを見たとき、黒木さんのことだからアメリカのことを書いたのかと早合点した。ところが読んでいくと決してそれだけではなく、同じ日本人同士でも階級、性、地域、年齢(世代)、職業を越えて、重複して人はすべて異文化を持っているのだと分かる。一人一人違うのだ。当たり前なことなのに、「皆同じ」文化の中で育った私など、人と同じでなければ安心できなくなっていた。それは自分を無くして生きることだった。これはしんどい生き方だと悟った時に、女性学との出会いがあった。

あなたと私は違う、違うけれど一緒にやっ

たい人がたくさんいる。連れ合いや仲間、友達、仕事仲間……。どうしたら人間関係がうまくいくか、それを教えてくれる本である。

次に感動したのは、「被害者からサバイバーへ」のところ。「被害者を支援しているように見える『善意の』人たちが、結果的には被害者の自助精神をくじき、被害者主義を押しつけている。」は、人をサポートする仕事についての私の反省点である。

サバイバーの癒しの基本は、個人がもつ潜在的力を引き出し、自己決定できるようになること。「これまでの弱者救済型の援助は、被害者のエンパワメントになるどころか、依存させることによってその人が本来もつ力を取り去る結果になっていた」とある。それは私自身のエンパワメントをどうするかという問題でもある。

異文化を生きる私たちに、自分の足元を示唆してくれる本である。ぜひ御一読を。

森 綾子 (ボランティアコーディネーター)

=書 評=

『インド女性学入門』

鳥居千代香著
新水社 1995円

北京で開催された第4回世界女性会議NGOフォーラムにおいてインドの女性たちのワークショップに参加したが私の語学力の不足で内容を深く理解することができず残念に思っていた。この『インド女性学入門』は、テントの入口にあった鉄ごうしを曲げて女性が外に出ようとしている絵の意味や、ワークショップでの女性たちの訴えをもっと知りたいと思っていた私にとって願ってもいない書であった。

本書は全国婦人新聞社の女性ニュースに毎月連載され、それをまとめたものであるということであるが、著者がインドに滞在し、多くの女性たちに実際に会って取材した内容を淡々と語っている文章である。その語り口には女性たちが物としてしか見られていない状況に同じ女性としての怒りが秘められているように感じられる。法的には1949年に制定されたインド憲法の第15条において宗教、人権、カースト、性、出生地による差別が禁止されているという。しかし、法的に整備されている制度も永年人々の意識に根差した文化、慣習、さらには最も大きな影響を持つ宗教によって築き上げられた男性優位社会を変えていく道のりの気の遠くなるような困難さを感じずにはいられない。

前章には未だ男中心の古い因習によって、神に捧げられる少女達デーヴァダーシー（神の女奴隷）制度、今も絶えないダウリーの犠牲者、生きた末亡人を焼く風習サティーなど、女性には過酷な文化、風習がこれでもかというほどに残っている現実、そしてのぞまれない女兒の出生率さえ減っているという根深い女性の地位の低さを国の文化として受け入れている女性たちの現状を語る。後章では、明日のインドに向かってと題し、独立後の女性の状況について、決定権を持つ立場にいる女性が日本よりずっと多くいることなどの報告書を取り上げている。インド警察初の女性幹部となったキラン・ベティについては、彼女の素晴らしい業績が本人の叡智と努力によるものであるとはいえ、これほどまでの地位を得ることができる現代インドの側面を知ることができる。イスラム法に挑戦する女性や、インディラ・ガンディの政治、中でも数々の迫害がもとで盗賊の女王となったプーラン・デヴィが96年の総選挙で国会議員に選出されたことなどは、はかり知れないインドの大きさである。それに惹かれる著者の思いが伝わってくると同時に、私にとってもインドへの大いなる興味を沸き立たせてくれる一冊となった。

あとがきにあるミスコンテストの反対運動に男性が積極的に関わっているのが真の意味での女性解放のためなのか男性の持ち物としての女性への応援なのか気がなるところである。

東川志津子（葛飾区女性センター職員）

上記の書評欄への投稿をお待ちしています。女性目で見直した鋭い批評や、視点を変えたユニークなものをお寄せください。400字詰原稿用紙に約2枚、900字前後です。掲載させて頂いた方には薄々謝、進呈致します。

「あなたの情報・私の情報」とコラム「わたしの出会った本」は、知って欲しい本、ご意見・情報交換等に御利用ください。400字以内でお願いします。但しこれらの欄は、薄々謝も差し上げられません。ご了承下さい。

尚、ご投稿は会員に限らせていただきます。宛先は

〒602 京都市上京区下立売通西洞院西入
松香堂書店「ウイメンズ ブックス係」
です。

次号の締切は 1997年7月20日。

たくさんのご投稿をお待ちしています。

※次号は1997年8月25日発行の予定です。

編集室から

○世の中には三種類の人がいるそうだ。時代に先んじた人、その時代の人、時代遅れの人。フェミニズムの草分け、キャロリン・G・ハイルブランは『ハムレットの母親』を抜群の目利きで書く。50代のバージニア・ウルフの評価、メイ・サートンの『夢見つつ深く植えよ』への共感。久しぶりに堪能した一冊。（やぎみね）

○近ごろ「〇〇の女性学」「女性学の〇〇」というようなタイトルの本が目立ちます。中には女性学の意味も全く知らずに使っているひどい本も。ご用心!!
○今号は3月新刊が多かったので、次号回しとなったのも何冊かあります。タイトルと副題だけで内容の判るような本には紹介文は入れませんでした。写真を入れて少しビジュアルにしました。ご意見などお聞かせ頂ければ幸いです。（とよこ）